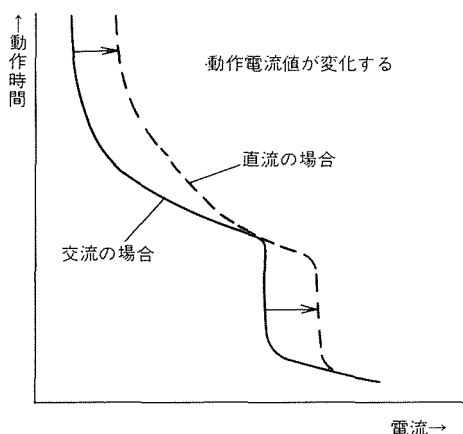


1. 直流回路への適用及び周波数による動作特性の変化

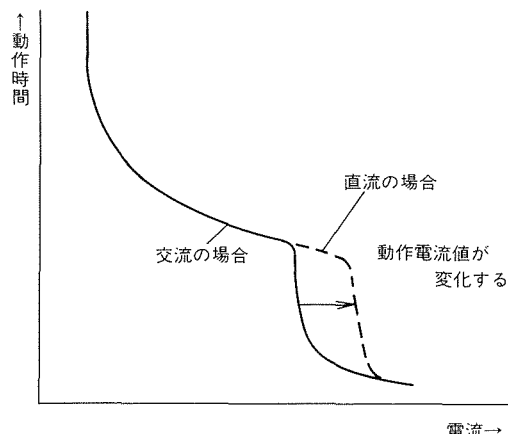
■ 交流用の遮断器を直流回路に使用した場合は動作特性が次の様に変わりますので、使用される際には注意が必要です。

● 完全電磁形



交流用のものは、直流回路で使用できない器種があります。仕様一覧表において「DC用はご指定下さい」の表示がありましたら専用タイプですので、ご指定下さい。また、その場合には電源の種類（純直流、単相全波、三相全波など）も併せてご指定下さい。

● 熱動-電磁形



瞬時領域（電磁動作）において動作電流値が変化いたしますから、選定にあたってはご注意ください。

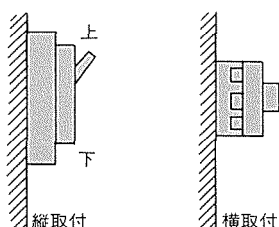
■ 高周波電流（400Hz、750Hz等）で使われる場合、うず電流、表皮効果、ヒステリシス損等による発生熱は熱動形でも影響があり定格電流が低減されます。（400Hzで－10～－20％程度）

したがって負荷電流は、配線用遮断器の定格電流の80％以下でご使用下さい。

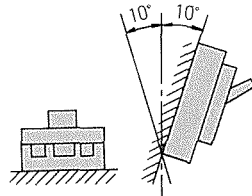
完全電磁形においては可動鉄心における発熱、うず電流損による吸引低下等により使用はできません。

2. 取付方向

● 良い例

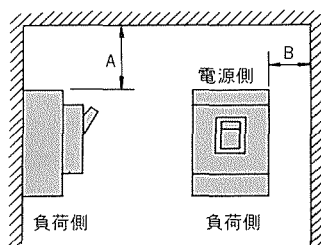


● 悪い例



■ 遮断器は鉛直面取付が基本です。
熱動形、熱動電磁形のもの、その他の取付面でも問題はあります。
完全電磁形のものにおいては、鉛直面取付（10°以内）以外の取付では特性が変化しますので、ご注意ください。

3. アークスペース



フレームサイズ	最小寸法(mm)	
	A	B
30～75AF	30	25
100～250AF	50	40
400～1200AF	80	50
1400AF以上	150	100

■ 遮断器が大電流を遮断したとき、電源側の排気孔からアークガスが噴出します。この排気孔のすぐ近くにしゃへい物や導電材があるとこの部分でアークによる短絡や、地絡事故を起す可能性があります。このため遮断器取付にあたっては左表に示すアークスペースが必要です。